海外語学研修の歩み10年間と今後の指針

山　田　隆　敏*

Overseas Language Study Programs : The Past 10 years and guideline for the future

Takatoshi YAMADA

要　旨

この取り組みは1991年より国際交流事業の一つとして毎年、海外語学研修を実施してきました。
これまでの幾多の実施不可能な状況の変化を乗り越えて、第10回目を無事に終了できた今年に、このプログラムの足跡を辿り、今後のプログラム実施に向けての何らかの指針を提示することは、初回から関わってきた者の責務と考えている。

この報告の中で、本学の夏期短期語学留学制度がどのような形で実施されてきたのか、また今後の展望は、いかにあるべきかついて述べてみたい。この報告によって教員、学生、保護者さらには学園関係者の間で、国際理解および教学上の役割についての認識と海外語学研修事業の一段の充実と発展を念願する次第である。

§1　海外語学研修の実施に至るまでの経過

学術文化交流の増大はもとより、外国企業の日本上陸、日本企業の海外進出に伴って国際化時代が到来した。このような状況に対応できる卒業生を送りだすために、国内の大学では、海外で実施の語学研修を経験させる制度が次第に定着し、留学生の受け入れおよび海外語学研修生の送り出しを担当する国際センターを学内に設置する大学が増加した。本学の場合、外国語学科を設置していない大学であるとはいえ、学生の主たる就職先の多くは、海外との取引の多い一般企業であることを考えるとき、海外研修の実施を真剣に考えるべきであるとの気運が学部内で高まり、綿密かつ慎重に調査・検討分析・討議の結果、以下のように実施に踏み切った。以下は平成3年度（1991年度）実施に至るまでの企画・実施までの経過報告である。

〔1〕実施案決定に至るまで

本学が宝来キャンパスから山陵キャンパスへ全面移転し、2学部1教養部の新体制となった秋初旬の頃より武久文代教授グループの発案で非公式に「海外語学研修」の雛型が検討されてきた。

平成12年9月29日受理　*教養部外国語科

検討の内容は主に次の2点であった。最初は『英語力、とりわけ国際化時代に即応できる生きた英会話力を身につけた学生の養成と、外国での生活を早期に体験させる必要性』そして『出生率の低下に伴う18才人口の急減と、予想される厳しい大学淘汰時代に対処し、国際化に柔軟に対処しうる奈良大学の対外的アピールづくりの必要性』などであった。しかしながら当初の学部会では、総論賛成、各論反対の空気が支配的であったが、当時の教養部部長市川良哉（現正強学園理事長）の積極的なリーダーシップによって、平成元年（1989年）5月に海外語学研修委員会（委員長大井聡一朗教授）の設置の運びとなった。委員会では具体的な検討を始めたが、諸問題が学内にも留学業者側にも山積しており、武久教授に現地調査をお願いすることを決定したあと、新たな委員会を結成し検討調査を続けることにした。このような最初の挫折の背景には、当時の上海列車事故（高知学芸高校の修学旅行）および海外留学をめぐる様々なトラブルに関する諸問題が集中した社会的事情が影響したのである。

新たな委員会は平成3年度海外語学研修委員会（委員長中村元一教授）の名称で平成2年（1990年）2月に発足し、平成3年度（1991年度）の実施を目指すことにした。新委員会では、武久教授の現地視察の報告を踏まえて、新しい候補大学として「クレアモント大学ピッツアカレッジ」を選んだ。さらに、本学の特別研究費の助成を受け、他大学の海外研修の実態調査研究を実施したのである。教養部内の教員の理解も得られるようになり、活動も積極化し、資料収集・ヒアリング調査も順調に進捗した。

委員会では概ね次のような日程で海外研修の実施案を練り作成を行った。

☆3～4月　　他大学の海外研修のヒアリング調査
☆5～6月　　研修目的・内容・方法等の検討。旅行実施業者の選定。
☆7月　　同行教員の決定。
☆9～10月　　実施細目の決定

次に、上記の検討項目の内で主なものを説明する。

(1) 研修目的

次の3点を主要な研修目標に置いた。

①英語が日常的に使用されている国に滞在することによって、英語への関心と英語の能力を高める（語学研修）。
②外国で生活することによって、その国の文化、生活、考え方等を理解する（異文化体験）。
③国際的視野の拡大を図る（世界で通用する人間の養成）。

(2) 研修内容と研修方法

☆(1)－①の目的を達成するためには、明確な指針に基づく英語の研修プログラムの作成が必要となる。（奈良大学独自のプログラム作成のための企画立案の徹底）
☆(1)－②の目的を達成するためには、ホームステイが望ましいとなった（一人一家庭の徹底）。

また、アメリカの風土についても見聞を広げるために、短い研修旅行を企画する（異文化体験の徹底）。

☆(1)－③の目的を達成するためには、綿密な事前研修を行なうことで、海外への関心を高める。

(3) 研修期間、研修時期、研修費用

①研修期間：　十分な語学研修という観点からすると、最低でも4週間という意見もあったが、費用、同行教員の負担を考えて、3週間ということになった。

②研修時期：　夏休みか春休みのどちらかが可能であるが、春休みは学生の多くが郷里に戻ってしまって事前研修が困難になること、教員の場合も多忙な時期になることなどを踏まえて、夏休み、それも航空運賃の点から7月中旬からの3週間に設定した。

③研修費用：　研修内容と小旅行の内容に関わる問題であるが、学生の負担感などを考慮し、小遣い等も含めて50万円を超えないようにすることにした。なお同行教員の経費については学生に負担させないことにした。

(4) 参加資格、参加人数

①参加資格：　教養部主催であることから、参加資格は1、2回生ということになるが、1回生は募集から事前研修の時間が十分に取れないので対象から外すことにした。3回生以上については、定員に余裕があれば認めることにした。

②参加人数：　教員2名で把握できうる人数ということで約30名、最大35名にした。

(5) 安全対策

今回の研修計画の立案にあたって最も注意を払い、かつ時間をかけて検討した点がこの安全対策であった。事故の発生を完全に避けることは不可能であるが、でき得るかぎり危険を避けること、事故が発生したときの連絡体制を確立することを基本にして具体的な対策を練った。具体的には、次の3点に絞られる。

①学生に対しては、事前研修を通じてアメリカの国情や生活習慣の違い、それに対する心構えとの注意を徹底させた。事故や犯罪に巻き込まれないように十分に注意するように指導することにした。

②緊急時の連絡を十分に保つために、研修期間中と小旅行期間中とに大別して緊急連絡網を作成した。

いずれも現地（研修受け入れ大学、同行教員、旅行業者現地本社）と奈良大学の間に常時連絡を取れる体制づくり確立することにした。

③参加者に対しては、主催者旅行保険以外に海外旅行傷害保険（最低２千万円）の加入を義務付けた。

(6) 同行教員の決定

武久教授、藤原剛教授（都合により遠藤隆助教授に変更）に決定した。

(7) 研修先および旅行取り扱い業者の選定

研修先の決定と旅行取り扱い業者の選定は密接に関連しており、これを別々に行なうことは不可能に近いので、委員会から次の要領を示し、業者側からモデルプランを提示してもらった。これに応じた業者はJTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行、ISAの４社であった。

☆「委員会から業者への研修プログラム提示要領」

①時　期：　７月上旬から８月上旬の３週間

②内　容：　大学主催語学研修とホームステイ２週間、および１週間のツアー

③地　域：　アメリカ西海岸

④目　的：　英語力の養成、異文化体験、国際的視野の拡大

⑤その他：　安全対策に十分配慮すること

☆〔業者から委員会へのモデルプランの提示結果〕

◇提出されたモデルプランを書類審査でISA、JTBの２社に絞り込んだ。

◇２社の業者の出席を求め説明を受けた。

◇委員会で審議検討の結果、以下の理由でISAプランの採用を決定した。

①英語研修主体：

ISA案は研修プログラムの企画自体を大学スタッフが担当し、委員会の趣旨に最も近い内容であった。＝奈良大学独自プログラム作成の可能性

②研修内容：

研修時間数については大差はないが、ISA案は多彩な内容になっており、十分組織化されて教育効果が期待される内容になっていた。さらに少人数（４～５人）のグループに対して付けられるディスカッションリーダーはフィールドトリップにも同行してくれて昼食時にも伴にしてくれるきめ細かい企画になっていた。

③研修プログラム受け入れ経験：

ISA案は、ピッツアカレッジと10年以上留学手続き経験によって作成されていた。また明確な指導体制が確立されていた。

④ホームステイ／ホストファミリー

ISA案のホストファミリーはピッツアカレッジとつながりのある学園、大学子弟の家族の中で、直接応募の中から選ばれ、プログラム内容を理解したファミリーのもとでホー

ムステイできる利点を持っていた。

⑤安全対策：

JTB案はツアーコンダクターが同行するので、緊急時の対応については優れている。

ISA案は現地駐在員はいるが、常時駐在しておらず、大事故の場合の即時対応に問題が残るが、小さなトラブルに対応した専任スタッフが研修大学の近くにいてきめ細かい対応可能な案になっていた。

§2　参加者の募集

実施案の決定後、以下の日程によって参加者の募集と決定を行なった。

○募集ポスターの掲示：11月７日

○説明会の開催日　　：11月16、21、28日

○応募者受け付け　　：12月10～15日

応募者：　新２回生25名、新３回生８名＝男子11名、女子22名

その後途中で辞退者、追加申し込み者等の若干名の入れ替え者があり最終的には次のようになった。

新２回生23名、新３回生10名＝男子12名、女子21名

○事前オリエンテーション：１月21日

参加申し込み者に申込金をISAに振込ませる（参加確定）

第１回事前オリエンテーションまでに、下記の準備をしておくように指示した。

①パスポートの取得

②ホストファミリーへの自己紹介文の原稿作成

§3　湾岸戦争勃発に伴う対応

海外語学研修実施のための諸準備は以上のごとく順調に進んだが１月16日湾岸戦争が勃発した。そのため航空機テロの危険性が高まり、学生の海外渡航の自粛を求める文部省および外務省の通達があった。審議の結果、戦況が膠着した場合は平成３年度の海外語学研修は中止せざるをえないという結論に達した。しかしながら戦況は流動的であり、事態の推移を見守った上で３月７日に最終決定を下すことになった。その後湾岸戦争は予想外に早く終結し、上記の通達は解除されたので平成３年度研修は予定通りに実施することに決定した。

§4　事前オリエンテーションの意義

世間一般的に語学研修といえば、「遊び半分、勉強半分」のような受けとめられ方もされていますが、本学の語学研修に関するかぎり「真面目に語学研修を行なう」の姿勢で貫かれています。

このような姿勢は、以下の事前オリエンテーションの実施によって生まれたものでした。

このオリエンテーションの主要な点は次の5点に集約できる。

①アメリカでの滞在、旅行に備えての準備を十分にさせる。

②アメリカ滞在中のトラブル、事故等を防止させるために必要な指導をする。

③ある程度の英会話力を身に付けさせる。

④ホームステイの意味を十分に理解させると同時にアメリカの生活習慣、物の考え方などについて予備知識を与える。

⑤日本の文化、生活等についてホームステイ先である程度の話ができるように指導する。

次に事前オリエンテーションの内容を簡単に説明する。

第1回（4月20日）

・海外語学研修の意義と目的

・オリエンテーションの目的と今後の計画

・パスポート等の確認と、アプリケーションその他の資料の記載と提出

・ホストファミリーへの自己紹介文の提出と添削希望日の申し込み

・英会話の練習計画の説明（昼食時の英会話、会話テキストの配布、録音テープの利用）

・ホームステイ先での交流に備えての日本紹介の準備（6つの小グループ）

(a)日本の生活 (b)物価、現代の日本 (c)奈良 (d)伝統文化、遊び (e)奈良大学、教育制度 (f)行事、趣味

第2回（5月25日）

・旅行費用、海外旅行傷害保険について

・アメリカの生活文化と家庭生活およびホームステイ中の諸注意

・ホームステイ先との交流にそなえて（グループ活動）

第3回（6月8日）

・安全対策および緊急事態発生時の連絡および対応措置について。

・アメリカでの生活についてのアドバイス。

・ホームステイ先との交流に備えて。

第4回（6月22日）

・安全対策とくに事故危険に巻き込まれないようにするためのアドバイス。

・出発にあたっての諸注意

・誓約書の回収

・研修記録、報告書の作成について。

・ホームステイ先との交流に備えて

第５回（６月29日）

・「ホームステイ先との交流に備えて」のグループ活動の成果報告。

・直前の連絡と諸注意。

§５　研修先ピッツアカレッジの紹介

(1) クレアモントの概観：

クレアモント市は閑静で町並みのきれいな住宅街である。緑の街路樹が豊かで、安全で治安のよい大学の町である。ロサンゼルス市内から北東に56km、車で１時間ほど、１年中、穏やかで明るい町である。

Claremont, California is a residential suburban community of 37,000 about 35 miles east of downtown Los Angeles. It is a pleasant, safe community with tree-lined streets and well-tended homes. Interesting restaurants, art galleries, and shops are only a short walk away from The Claremont Colleges. Hiking and skiing are available at nearby Mount Baldly. The Pacific Ocean beaches, the Majave Desert and the cultural, educational, and entertainment centers of greater Los Angeles are an hour away. Claremont has a warm, dry, and sunny climate throuhout most of the year with occasional rain in the winter.

(2) クレアモント大学（The Claremont Colleges）

アメリカでもユニークな学科、特徴のあるカリキュラムと学風で知られているクレアモント大学（The Claremont Colleges）の内でも社会科学系の学問分野で、西のアイビーリーグとも称されるピッツアカレッジを含めて、大学が５校、大学院が１校で構成されている。学生数5000人の堅実な大学である。

The Claremont Colleges are a cluster of five undergraduate colleges and a graduate university. These include Pitzer College, Claremont Graduate University, Claremont Mckenna College, Harvey Mudd College, Pomona College and Scripps College.

Each college has its own faculty, campus, curricular emphasis, distinctive style, and mission. The Colleges have adjointing campases and cooperate to provide the services and facilities of a 5,000-student universigy. Approximately 2,500 courses are offered each year. Students enrolled in any of the Colleges may take a variety of courses in the others. Most students live on campus and enjoy the benefits of studying and living together in a deverse, lively, and personal academic community.

(3) ピッツアカレッジ（Pitzer College）

私学、男女共学、教養学部で、アメリカでも社会科学系の分野で優れ、西のアイビーリーグとも称される名門大学である。教学面でもフィールドワーク（演習形式）を根幹にした授業形態を取り入れ、かつ国内外の教育的効果を理念にした校風を持ち、積極的に異文化間教育を押し進め

ている大学である。

A private, undergraduate, coeducational liberal arts institution, Pitzer College is consistently ranked among the best such colleges in the country. Pitzer is an intimate college backed by the resources of the Claremont Colleges.

Blending classroom instruction with fieldwork. Pitzer engages a student's mind, heart and spirit by integrating educational resources on-campus, abroad and in the local community.

Pitzer offers a curriculun that spans 40 major fields and focuses on interdiscipliary, intercultural education with an emphasis on social responsibility and community service.

(4) ペースプログラム（PACE）

ピッツアカレッジのPACEプログラム（Program in American College English）は、国内外の非英語系外国学生と英語系学生との語学教育の利点を積極的に推し進めたプログラムのユニークさとその実績でよく知られている。さまざまなシステム、例えば、夏だけ、半期セメスターだけなどのコースが設定されている。このプログラムは、留学準備コースとしての利用も可能である。

Students join the Program in American College English (PACE) to develop university-level English and enjoy the stimulating environment of studying on an American university campus. PACE is known for its excellent integration of English language students with American students. its challenging intensive courses, the warm. parsonal attention of its faculty and staff, and its ability to help students meet their academic goals. Some PACE students come for only a summer session to polish their English. Most come for a semester of year to immerse themselves in campus life and t prepare for university study in the U.S. After PACE, many students study at colleges and universities across the U.S. Others return home to find excellent jobs or continue their studies with refined English skills.

§6 第1回 海外語学研修プログラムの概要

(1) 研修内容：

☆クレアモント大学ピッツアカレッジにおける2週間の英語研修プログラム

実用英語研修（カルチュラルセミナーも含む）：22時間

生きた英会話（with Group Discussion Leader）：13時間

☆ピッツアカレッジの手配によるファミリーへのホームステイプログラム（14日間）

☆上記プログラム進行に含まれる諸行事、課外活動

①歓迎会（Welcome Party）：7月16日

PACE Officeのメンバー、ホストファミリー、ディスカッションリーダーとともに約2時間。

②ユニヴァーサルスタジオ見学　(universal Staduim)：7月17日

PACE Officeメンバー1名、ディスカッションリーダー8名とともに終日見学。

③ハンティントン植物園（Huntington Garden）：7月19日

PACE Officeメンバー1名、ディスカッションリーダー8名とともに午後見学。

④クレアモント高校　(Claremont High School)：7月22日

PACE Officeメンバー1名とともに授業参観、そしてグループごとに討論に参加。午前中。

⑤野球見物（Dogers Stadium）：7月23日

PACE Officeメンバー、ディスカッションリーダー8名とともに夕方から見学。

⑥JAPAN NIGHT：7月24日

異文化紹介とレクリエーション。ゲストはPACE Officeのメンバーとホストファミリー。午後。夙川短大生も加わって盛り上がる。

⑦ディズニーランド（disney-Land）：7月25日

PACE Officeメンバー1名、ディスカッションリーダー8名とともに終日見学。

⑧ディナーション：7月26日

非公式プログラム。料金26ドルでミュージカル鑑賞つき夕食。

⑨送別会（Farewell Party）：7月27日

ホストファミリーごとにテーブルにつき、本格的なディナーをとる。

プログラム総責任者キャロル氏の挨拶の後、学生一人一人に終了証が手渡される。

武久教授のお礼の挨拶の後、学生全員の日本の歌の合唱があった。最後に、ホストファミリーにお礼の花束贈呈の後お開きになった。

(2) 研修旅行

①グランドキャニオン：7月28日～29日

オンタリオ空港→ラスベガス空港→小型飛行機グランドキャニオン遊覧飛行→ラスベガス泊（夕刻近くに観光バスでsunset tour）と（翌朝4時30分にsunrise tour）の実施。

②サンフランシスコ市内自由見学：7月29日～31日

ラスベガス空港→サンフランシスコ→半日観光バスで市内見学。

翌朝は終日市内をグループ別自由見学。

(3) PACEスタッフとの打ち合せ

上記の現地研修を上首尾に終わらせるためには、同行教員とPACEスタッフ間で十分にコンタクト常時取っておく必要があるものと考えた。そのため、本学からは武久教授が、PACEからはプログラム責任者のキャロル先生が窓口となって、頻繁に事前にまた現地でも綿密な打ち合せを行なった。武久教授がプログラム実施前に現地視察を行なって現地の内情を知るとともにキャロル先生と深い人間関係を築けたのは、何にもましてたいへん有意義なことであった。打ち合せ・情報交換の内容は次のようなものであった。

奈良大学→PACE：学生の健康状態等の通知、学生の授業に対する要望、様々な情報交換。
PACE→奈良大学：プログラム変更に対する了解、さまざまな相談・情報伝達、学生に周知徹底させる事項について確認依頼など。

このような目立たない地味な接触の他、プログラムの最終近くには、同行教員はPACEのスタッフ全員（英語教員3名含む）を招待して、研修のお礼と来年度実施に向けたお願いを兼ねたディナーを主催し、研修の成果について相互に話し合った。

§7　第1回から第10回までのプログラム概要と今後の指針

第1回プログラム実施から第10回プログラムの実施終了までの日本を取り巻く世界情勢を考えた場合、まず言えることは、米ソ冷戦の終焉に始まる世界の枠組みの再編成に伴う政治・経済・国家間の主権争いの問題が挙げられよう。さらに国内に目を向ければ、バブルの崩壊に伴う経済の再編成とアジアと世界における日本の相対的な威信の低下が挙げられよう。具体的には、①EU=EUROの定着化、②アメリカを核にしての高速情報（IT）経済圏の推進、③アジア諸国の脱日本化と、中・台情勢さらには南北朝鮮問題等における日本の姿勢、④不良債権問題処理による国内経済界の再編成とゼロ金利政策、それによる外国資本の国外流失、⑤急速な高齢化問題と介護保険制度の導入、⑥少子化問題と学級崩壊、などである。このように日本を取り巻く情勢は、地球環境的に流動化、価値観の多様化とともに急速なる変革の時代を迎えている。

その反面、帰国子女、日系人、在日外国人、海外留学生等の増加とともに、教育面の言語運用能力に対する法的整備の養成と情報化教育の充実養成が高等教育機関に寄せられる時代を迎えている。このような急速な国際化と高速情報化要請に即応した正しい認識と行動力を育成する大学教育の必要性が今求められているわけである。このような趨勢に鑑み、教養部および外国語科では第8回プログラム（1998年度）から、現地研修を伴う単位として「海外語学研修」（集中科目、通年、2単位）に取り込み、単位を取得できるシステムに再編成した。

これまでの海外研修の概要は以下の表に示したが、1991年に第1回を実施して以来現在までに、すでに10回の海外語学研修を無事に終了し、奈良大学の海外短期留学の制度としてすっかり定着した感がある。ほぼ軌道にのった感のある海外語学研修も、ここに至るまではいくつもの諸問題を抱えてその都度解決してきた。§1から§4で詳述したように、いざ企画を進めてみると様々な問題を処理しなければならなかった。具体的には①事故の場合の責任、②同行教員の役割と負担、③参加学生の参加費用の軽減、④旅行取り扱い業者との折衝、等がその主なものであった。しかし、これらの問題は教養部の教員の協力と大学当局と協議を重ねることでその都度乗り越えてきた。このような様々な労苦を考えると、海外語学研修の再検討案とか隔年おき案とかが話題にのぼることもあった。しかしこれは少数意見にすぎず、あくまでこの制度の継続を求める支援協力に支えられた。10回という蓄積は教養部の財産であり、念願の単位認定科目化も認定された今、この海外研修留学制度も前向きに新たなる制度づくりの段階を迎えている。

また、学生に対するアンケート調査でも海外語学研修（海外短期留学制度）に期待している学生の多いことがうかがわれ、この制度のさらなる多様化、すなわち中期留学（半期セメスター留

学）制度等の検討を求める声が高まっている。

ここで海外語学研修委員として、また同行教員として何よりも難しいことは、各回の参加学生との結びつき（絆）が、学部のゼミ学生に勝るとも劣らない程度に深まっていることである。これは教員にとって教育業績、評価成績等に比べられぬ幸せであり宝である。

このようなメリット、デメリットを考慮した場合、調査検討は重ねつつも拙速は厳に謹むべきであり、今後一層海外短期中期留学制度の実現に向けての意欲が湧いてくる。少子高齢化の時代を迎え、大学の生き残りをかけて教育・研究・経営面での大学改革に教職員負担が増加している中でも、大学・私学の教学上の魅力づくりに学生アンケート調査結果（海外留学制度の充実の声に対する配慮も忘れてはならない。

奈良大学海外語学研修旅行一覧

回数	期　間	日数	研修大学	予算	同行教員	全体	男子	女子	備　考
1	1991.7.14～8.1	19	ピッツア大学	46.8万	武久・遠藤	33	13	20	現地責任者：Ms. Carol
2	1992.7.16～8.5	21	〃	45.3	藤原	10	6	4	
3	1993.7.17～8.6	21	〃	43.4	SWAN	13	5	8	
4	1994.7.17～8.6	21	〃	44.9	山田・(森山)	13	4	9	(森山先生は自費で参加)
5	1995.8.13～9.3	22	〃	44.9	SWAN	15	7	8	
6	1996.8.11～9.1	22	〃	42.0	森山	12	8	4	
7	1997.8.11～9.1	22	〃	44.8	武久／増本	9	4	5	(同行教員の都合により途中交替)
8	1998.8.13～9.3	22	〃	47.5	山田	20	12	8	
9	1999.8.17～9.7	22	〃	46.9	森山	16	5	11	現地責任者：Mr. Michael
10	2000.8.17～9.5	20	〃	37.98	山田	19	5	14	

※第10回の旅行経費軽減を含め、今後の指針については、§8および第10回報告書で詳しく述べる。

※第10回の教養部の新たな試みとして、中国での短期留学を以下のように実行した。
研修地は中国（上海）の復旦大学で、本学の姉妹校である。

1	2000.8.14～8.31	18	復旦大学(上海)	22.25万	蘇・山本(美)	34	7	27	見学：上海、抗州、西安、北京

§8　第10回海外語学研修の実施にあたって

(1) 語学研修目的・内容等の総括

語学研修の目的は、学生側と教師側とではおのずから異なる場合がある。学生側の希望はまことに様々であるが、教師側の場合は、まず教養に籍を置くものとして考えた場合、学生の人格形成という観点から①語学研修、②異文化体験、という2点を挙げられるよう。日本、日本語、日本人の3点で括られる我々の生活文化の中で、『異』の概念を外国の地で直に経験することは国内ではとうてい得られないものである。すなわち同質に近い日本社会のなかで、『異質』の概念は心と体で十分に会得できないものである。

『異の概念』(出会い) は学生にとって新鮮なものであり、その反面、魅力的で危険なものでもある。

第1回から第9回までのアンケート調査結果報告の「語学研修について」の項目を総括した場合、語学研修プログラム (研修先、授業内容、ドームステイ、ホームステイ等) は全体としても「非常に良かった」(82%) の声が圧倒的である。このデーターが示すものは、本学のこれまでの海外語学研修そのものが概ね理解され支持されたと考えるべきだろう。ただ問題は、研修期間の「短すぎる」(64%) であろう。語学研修期間を長くするには、プログラム内容の再検討と研修旅行の廃止か短縮という新たな問題が生じる。

全体の期間延長は、研修旅行の「このままで良い」(92%) と、研修費用の「妥当」(74%) などを考慮に入れて考えねばならない課題である。§7で既に述べたように「中期留学制度」の設置を前向きに考えねばならない時機になっている訳である。

(2) 第10回海外語学研修実施案決定に至るまで。

上記の「§7奈良大学海外語学研修一覧表」の第10回の項で指摘したように、中国海外語学研修 (同行教員：蘇教授。場所：復旦大学、上海市) との同時実施が、1999年度海外語学研修委員会 (委員長；蘇教授) で決定され、それぞれの実施案作成委員に、英語案は山田、スワン両助教授、そして中国語案に蘇教授に一任された。限られた学生数のなかでの2案同時開催について、アメリカ案を担当する我々が、強い危機感を持つのは当然なことであった。その危機感の主なるものは、①文学部の学科の構成上から観る中国指向姓の強さ、②研修費用の超格安さ、③同行教員が本学の姉妹校で、かつ、姉妹校の元教授である蘇教授であり、今回はじめての教養部のプログラムであること等である。①②③のいずれもが、アメリカ案に強烈すぎるインパクトを与えた。その結果、我々はプログラムの再検討を、特に②の対策を至急に考慮しなければならなくなった。

国内の旅行取り扱い業者の担当は、山田が対応し、研修プログラムの研修費用・内容・方法については、山田、スワンの両者で対応することにした。その都度、委員会に原案を提示して認可を得ることとした。

アメリカ案では概ね下記の日程で実施案作成に取りかかった。

(a) 1999.12月　：第１回国内旅行業者入札日。ピッツア・プログラム費用第１回提示日
(b) 2000.01～２月：第２回国内旅行業者入札日。ピッツア・プログラム費用第２回提示日
(c)　01月　：研修目的、内容、方法等の再検討。
(d)　02～３月：同行教員の決定
(e)　03月　：実施細目の決定。パンフレットの作成。募集開始。
(f)　04月　：パンフレットの配布。募集説明会（オリエンテーション時数回）の実施。事前講習の開始。

(1) 旅行業者との対応：

旅行業者の入札については、委員会名では以下の要領案を示し、モデルプランを提示してもらった。対応は山田が担当した。

(a) 時期：８月中旬～９月初旬
(b) 内容：語学研修２週間とドームステイとホームステイ、そして研修旅行
(c) 地域：クレアモント大学ピッツアカレッジ校
　研修旅行他：サンフランシスコ市
(d) その他：Ⅰ）旅行条件は主催旅行であること（研修中の活動内容を含む）。
　Ⅱ）第１回目：旅行条件の上限は20万円を切ること。第２回目：18万円を切ること。（ピッツア大学からの提示のプログラム費用を除いた額）
　Ⅲ）明確な緊急連絡体制網を提示すること。
　Ⅳ）業者の窓口担当者との信頼関係の有無。
　Ⅴ）現地窓口と国内業者との連絡体制の状態。
　Ⅵ）プログラム内容は、奈良大学対応の件を明示し分離審査とした。
　Ⅶ）ピッツア校とのスムーズな連絡体制と、今後の展望についての展望。
　Ⅷ）研修旅行地での緊急連絡体制の内容。
　Ⅸ）主な業務は、研修学生の送迎とプログラム研修経費の支払代行である。
(e) 入札会社：JTB教育旅行、東急観光、日本旅行、日通旅行、近畿日本ツーリスト

①第１回入札結果：諸条件の比較検討の結果、近畿日本ツーリストに辞退してもらった。
その後、残った業者に(d)－Ⅰ、Ⅱの要領案を提示して企業努力を要請した。
②第２回入札結果：諸条件の比較検討の結果、東急観光、日本旅行に辞退してもらった。
その後、残った業者に(a)～(d)Ⅰ)～Ⅸの諸条件を提示し、さらなる企業努力をお願いした。
③第３回入札結果：諸条件を比較検討結果、今年度は日通旅行にお願いすることにした。
④誓約書の交換：下記の条件について、誓約書を取り交わした（2000.２.10）。
　第１項：旅行者に対する責任
　第２項：事故処理と連絡体制
　第３項：協力体制
☆入札業者を決定するまでに、５社の担当者および担当者の上司の方々と数えきれないほど対

応し、プログラムの様々な面について案を煮詰めた。何より肝要なことは、旅行業者との信頼関係であり、この点では各社とも甲乙つけがたく、各社の担当者とも長時間にわたって情報交換しながら、今後の人的資源は継続できたものと考えている。

(2) ピッツア校PACEプログラム担当者との対応

PACE担当者は第1回から第8回までMs. Carolであったが、第9回以降からはMr.Michaelに変更になった。

PACE Programについては、委員会委員長の了承のもとに、SWAN助教授と山田が窓口となって対応した。IT時代でもあり、対応の殆どは、E-mailに頼った。またE-mailと英文表現の殆どは、契約を伴う案件であり、法律的、政治的な観点からSWAN助教授の援助に負うところ誠に多大である。対応については、国内の場合と同じく委員会名でこちらの要望案を示し、双方に意見交換を行なって了解点を煮詰める手法を採った。

(a) 奈良大学要望案

1) 10年間の集大成にあたり、また、20世紀の最終年度を飾るため、また21世紀への新しいプログラム作成をしたい旨の作成目的を伝達した。

2) 10年間の短期留学制度の存続とともに、新たに中長期留学制度も視野に置いた展望もプログラム作成の条件に含めてほしい旨を伝達した。

3) 今年度は中国短期留学プログラムとの競合であり、その経緯を配慮して語学研修経費の軽減をお願いした。ただその前提条件として、語学研修と異文化体験内容の質を下げないように要望した。

(b) PACE側返答

I) 上記の1)～3)の諸条件は了承した。プログラム経費、プログラム外研修旅行(サンフランシスコ見学)および現地での海外旅行傷害保険等の取り扱いについても最大限考慮するとの返事あり。

II) プログラム経費提案

☆1. 15人以上の場合;

研修期間(19日)=$2275

(17日)=$2035

☆2. 20以上の場合:

研修期間(19日)=$1975

(17日)=$1765

※ここで、プログラムの内容点検に入り、研修内容の質的向上と一人一人家庭のホストファミリーの確保などの条件についてE-mail交換を繰り返し、下記の研修プログラム経費になった。

2000年度奈良大学プログラム参加学生負担費用(一人あたり)=$1950

Ⅲ）Pitzer College: Memorandum of Agreement with Nara Universityの締結

〔締結の概要〕

①期間　②参加人数　③宿泊　④食事　⑤授業　⑥ディスカッションとの会話
⑦異文化セミナー　⑧評価　⑨施設利用　⑩小旅行　⑪参加条件
⑫学生引率の義務　⑬プログラム費用　⑭保証と支払　⑮公示
⑯極秘条件　⑰覚え書き変更等　⑱保証条件
⑲覚え書きの条項と規定はもっぱらカリフォルニア州報の解釈による。

〈署名〉ピッツアカレッジ代表：Ms. Carol
　　奈良大学代表　　：（教養部長）松井春満

(3) 2000年度海外語学研修参加費用の決定（プライスダウン）とその意義。

上記の(1)と(2)の費用を併せることで参加費用が決定されるのであるが、従来のように業者と研修先に学習プログラムを含めて、経費費用を白紙委任のような形で一任するのではなく、奈良大学がリーダーシップをとって学生のニーズ、学習能力にマッチし、さらには経費の軽減に勤めた結果、1999年度に比較して約９万円に近いプライスダウンを勝ち得たのである。(46.9万－37.98＝8.92万円)

このように最高の環境づくりが、大学の義務と責任の履行で成し遂げられる大きなメリットを、大学主催の語学短期留学制度には存在するのである。要するに、学生側の自覚と認識、大学側の指導によってこのプログラムは、『安全と学習成果と廉価な研修内容』を学生たちに提供できるのである。

研修費用のこれ以上の軽減は無理かもしれないが、一定数の意欲のあって基礎能力のある学生を確保するためには、そして文字どおりの研修の実を挙げるためには、大学側の自主的な企画立案による方策を今後とも講じねばならない。

第10回の「海外語学研修報告書」の中で、§７と８の内容については、詳しく説明しているので参照されたい。

参考文献

海外語学研修委員会、1991：「1991年度第１回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1992：「1992年度第２回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1993：「1993年度第３回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1994：「1994年度第４回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1995：「1995年度第５回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1996：「1996年度第６回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1997：「1997年度第７回海外語学研修報告書」
海外語学研修委員会、1998：「The 8th. Report of the Study Abroad Program at Pitzer College, August, 1998」

海外語学研修委員会、1999：「August, 1999, The 9th. Report of the Study Abroad Program at Pitzer College」

Resume

Nara University has maintained Study Abroad Programs since 1991. This year has successfully concluded its tenth year.

In this report, we suggest some guidelines for the conduct of future years'programs.

From teachers, students, parents and the administrations, we hope this report will help achieve international understandings and the educational role of Nara University Summer Programs.